Niigata
Award
News
(食の新潟国際賞財団通信)

Niigata Award

佐野藤三郎氏が新潟市名誉市民に決定
佐野藤三郎顕彰委員会が新たに発足
食の新潟国際賞財団　令和5年第2回理事会を開催
特別講演会「激動する世界情勢と食料問題」を開催

2024/5/20　第51号

佐野藤三郎氏を新潟市名誉市民に決定　73年ぶり
新潟市議会本会議で全会一致で可決

【佐野藤三郎氏　略歴(1923～1994)】

大正12年(1923)中蒲原郡石山村(現新潟市東区)の農家に生まれる。
19歳で海軍に応召し戦地で九死に一生を得る。終戦後農民運動に参加し農地解放運動で活躍。22歳で新潟市農地委員に就任。
昭和30年(1955)32歳で亀田郷土地改良区理事長就任、組織の借金問題解決に奔走。亀田郷の乾田化の総仕上げと、乾田化後の農業技術の確立や都市との共存、新潟市の街づくりに多大なリーダーシップを発揮。新潟地震からの復興と親松排水機場の新設等に尽力した。
実績に着目した中国政府の要請を受け、中国東北部の三江平原開発に協力。昭和51年(1976)から中国を度々訪問し、竜頭橋ダム建設に日本のODAを実現、農業基盤整備に尽力した。
新潟県日中友好協会を設立し会長に就任。中国との友好・協力に貢献した。
平成6年(1994)3月、農林水産大臣賞受賞の深夜、突然倒れ70歳で急逝。約40年にわたり亀田郷土地改良区理事長を務めた。

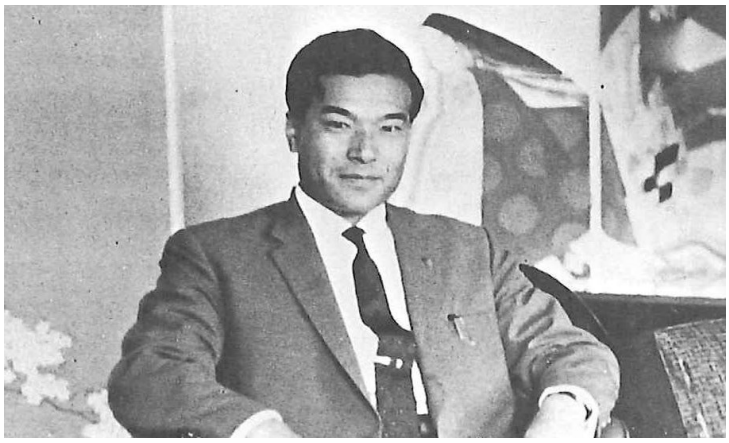
佐野藤三郎氏を新潟市名誉市民とする議案が、令和6年3月26日(火)の新潟市議会本会議で全員一致で可決され、新らたに新潟市名誉市民が誕生しました。

新潟市議会本会議では中原八一市長が「佐野氏を新潟市名誉市民とする議案」の提案理由を説明し、採決の結果、全員起立で可決され、佐野氏が新潟市名誉市民に決定しました。
新潟市名誉市民は、昭和26年に會津八一氏ら三氏が選定されて以来で、73年ぶりの誕生です。
佐野氏を名誉市民に推薦する活動は、新潟市の経済団体などで組織する実行委員会(佐野藤三郎生誕100年記念事業実行委員会)が要望していたものです。

実行委員会では佐野氏の生誕100年に合わせて、広く市民に佐野氏の業績への理解を広げるための活動を数多く展開してきました。今後は、名誉市民の祝賀会等を開催し顕彰活動を継続する予定です。

「佐野藤三郎氏に新潟市名誉市民の称号を授与する要望書」を新潟市長と新潟市議会議長に提出
(佐野藤三郎生誕100年記念事業実行委員会)
(2023年11月24日)

73年ぶりに新潟市名誉市民が誕生



亀田郷土地改良区理事長就任当時の佐野氏

中原市長の提案理由説明（要旨）

佐野氏は、旧石山村、現在の東区の生まれで、昭和30年から、約40年にわたり亀田郷土地改良区理事長を務められました。 農業をはじめ、まちづくり、国際交流などの分野において功績が顕著であり、本市の発展に多大な貢献をされた方であります。

農業の分野においては、かつて「芦沼」や「地図にない湖」と呼ばれ、胸や腰まで水に浸(つか)って農作業していた湿田を、日本有数の穀倉地帯に変えるため、多くの土地改良事業に取り組まれ、本市の農業の発展に大きな功績を残されました。

昭和39年に発生した新潟地震からの復興にも力を尽くされ、 被災した農地や施設の復旧、親松排水機場の整備促進などに取り組まれました。佐野氏による排水改良の取組は、海抜ゼロメートル地帯が広がる本市において、市民の安心安全の確保という面でも、大きな功績となっています。

まちづくりの分野においては、昭和の中頃から、都市化の急速な進行を背景に、農地転用が急増していく中、土地利用計画の策定や調整などを担う新たな組織を創設し、都市の発展と農業の健全な調和に向けて、農村と都市が共に発展できる地域づくりに取り組まれました。

こういった理念は、現在の、都市と農業が調和する新潟市につながっており、県・市・亀田郷土地改良区の三者が進めている「鳥屋野潟南部　開発計画」に受け継がれるなど、本市のまちづくりにも大きな影響を与えました。

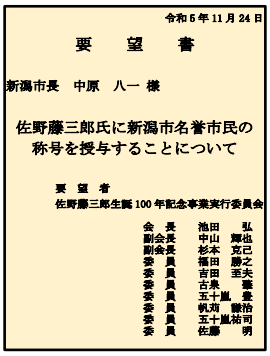
国際交流の分野においては、中国政府からの、黒龍江省に広がる三江平原(さんこうへいげん)の農業開発への協力要請に対して積極的に協力し、中国の大食料生産基地の実現に向けて奔走されました。

この中国での取組を契機に、「新潟県日中友好協会」や「日本海圏経済研究会」を設立するなど、環日本海を軸とした経済交流の流れを作り、本市の国際交流の先駆者として、大きな功績を残されました。

このように、広い分野で功績が顕著であったことから、佐野氏が亡くなった後も、「食の新潟国際賞財団」による「佐野藤三郎記念　食の新潟国際賞」の創設や、市内の経済団体などが様々な顕彰活動に取り組むなど、佐野氏の功績を称える取組が広く行われてきました。

また、昨年11月には、市と市議会に対し、名誉市民称号の授与に関する要望が提出されたことから、今年1月に、新潟市名誉市民選考委員会を開催したところ、委員である有識者の皆さまから、全会一致をもって、「佐野氏は、名誉市民に相応しい方である」とご半断いただきました。

これらのことを踏まえ、佐野藤三郎氏を新潟市名誉市民に選定するものです。



令和５年１１月２４日

要　望　書

新潟市長　中原　八一 様

佐野藤三郎氏に新潟市名誉市民の
称号を授与することについて

要 望 者
佐野藤三郎生誕 100 年記念事業実行委員会

会　長　池田　　弘
副会長　中山　輝也
副会長　杉本　克己
委　員　福田　勝之
委　員　吉田　至夫
委　員　古泉　　豪
委　員　五十嵐　豊
委　員　帆苅　勝治
委　員　五十嵐祐司
委　員　佐藤　　明

新潟市長、市議会議長へ要望を提出。（2023年11月24日）

議会傍聴後の佐野正人氏（佐野藤三郎氏ご子息・中央）

名誉市民決定を受けて「佐野藤三郎顕彰委員会」に改称

佐野藤三郎生誕100年記念事業実行委員会の第3回実行委員会が5月8日（水）に新潟市のホテルで開催されました。
この実行委員会は新潟市の経済団体や亀田郷土地改良区等の団体で組織し、事務局を食の新潟国際賞財団が務め、昨年度1年間、佐野藤三郎氏の顕彰と広く市民に知ってもらう事業を行って、佐野氏を新潟市の名誉市民にする活動を行ってきました。
第3回実行委員会では、1年間の活動実績が報告され了承されました。
そして、佐野氏が新潟市の名誉市民に決定したことから、さらに活動期間を1年間延長して令和7年3月までとすることと、名称を「佐野藤三郎顕彰委員会」と改称することなどが決定しました。
また、委員会では今後、名誉市民称号の授与に合わせて祝賀会等を開催するとともに、引き続き佐野氏について顕彰活動や広報活動を行うこととし、下記の事業計画を審議し承認しました。

佐野藤三郎生誕100年記念事業実行委員会　第3回実行委員会を開催　（2024年5月8日）

令和6年度の活動計画を決定

①新潟市名誉市民称号授与式・祝賀会の開催と協力
②佐野氏の足跡を巡るバスツアーの実施
（食の新潟国際賞財団・亀田郷土地改良区）
③広報事業
佐野氏のホームページ制作と開設
（食の新潟国際賞財団・亀田郷土地改良区）
佐野氏広報用動画の作成
（食の新潟国際賞財団）
④マンガ活用事業
小学生対象のマンガ読書感想文コンテストの企画・実施
マンガ増刷・販売・配布事業（食の新潟国際賞財団）
⑤第5次訪中団の派遣を検討する。
合わせて中国・黒竜省のジャムス大学内にある、新潟館の展示場の整理を行う。

名誉市民称号受章までの経緯

①実行委員会ではセミナーやツアーはじめ幅広く広報活動を実施
②令和5年10月2日
新潟市議会議員への説明会を開催
③1月24日
「要望書」を中原新潟市長と皆川議長へ提出
④12月22日
新潟市名誉市民条例の改正案可決
⑤令和6年2月
「佐野藤三郎氏の名誉市民称号審査会」が賛成の諮問を答申
⑥3月26日
新潟市議会本会議で可決

佐野藤三郎生誕100年記念シンポジウムには187名が参加し佐野氏の業績を顕彰した　（2023年11月9日）

まんが「にいがた偉人伝佐野藤三郎」は2500部制作、新潟市内の小・中・高校等・大学・図書館・公民館他に寄贈された。

令和6年度の事業と予算を決定　理事会を開催

令和6年度の財団の事業計画と予算案を審議する、定例理事会が4月26日（金）に新潟市のホテルで開催され、令和6年度の事業と予算が決定しました。
令和6年度の主な事業は以下に掲載の通りです。
今年度は第8回食の新潟国際賞表彰式が11月20日（水）に、新潟市のときメッセで開催されます。
なお、事業の詳細と、予算についてはホームページに掲載してありますのでご覧下さい。

https://www.niigata-award.jp/contents/about/index.html

令和6年度活動計画　（令和6年5月1日～令和7年4月30日）

1．令和6年度の活動方針

令和6年度は第8回食の新潟国際賞の表彰事業を開催し、国内外からの食と農の情報収集と新潟の発信に努めるとともに、この機会を活用して国内外の関係機関・団体・研究機関等とのネットワークを拡大し、併せて国際賞の広報活動を通じて財団と国際賞の知名度アップを図る。
今年は財団創立15周年の年に当たることから、これまでの活動を振り返り、15年の活動記録をまとめた記念誌の発行や、記念講演会・会員交流会を開催し、創設理念に立ち返り、地域社会への貢献や地域経済発展へ寄与するとともに、会員・企業へ還元する事業活動に取り組む。
そして、食の新潟国際賞の冠である佐野藤三郎氏の新潟市名誉市民称号の受章を機に、佐野藤三郎氏の偉業を伝えるとともに、今後の新潟の発展に繋げる活動も実施する。
また、行政や会員・産業界・大学との連携による、食と農をテーマにした学生ビジョンコンテストを継続開催し、学生の農業及び食料についての関心と、財団や食の新潟国際賞への認知度を高め、将来の食と農の分野の人材育成にも寄与する。
引き続きSDGsの普及と取り組みを推進する事業や、食品産業や農業をテーマした講演会、セミナーを開催し食と農の国内外の情報の収集と発信に努める。

2．第8回食の新潟国際賞　表彰事業の開催

内　容：表彰式
　　記念講演会・祝賀交流パーティー
開催日：11月20日（水）
会　場：新潟市　朱鷺メッセ　国際会議室

月　日（曜）	行　事	会　場
11月19日（火）	受賞者新潟入り リハーサル	ホテル日航新潟 朱鷺メッセ
11月20日（水） 10：00～11：00 14：00～15：00 15：00～17：00 17：30～19：30	 受賞者新潟市長表敬訪問 表彰式 記念講演 受賞祝賀交流パーティー	 新潟市役所 朱鷺メッセ 国際会議室（マリンホール） ホテル日航新潟
11月21日（木）	受賞者・市内視察	市内

３．食の新潟国際賞財団創立15周年記念事業

今年度、財団創立15周年を迎え、これまでの財団の事業活動を総括した活動記録をまとめた記念誌を発行する。20周年に向け記念講演会と会員の交流事業を開催する。

（1）財団創立15周年記念誌の発行
内容：財団の設立と経緯、役員、事業活動の歴史、国際賞事業と受賞者一覧
発行：令和7年2月（予定）

（2）財団創立15周年記念講演会・交流会
開催日：令和7年2月
テーマ：「世界の食と農の最新情報と新潟の可能性」(仮)

４．「にいがた食と農の未来」学生ビジョンコンテスト2024の開催

内　容：新潟県内の大学・大学院・専門学校・農業大学校等の学生・生徒から、県内の食料産業と農業の未来ビジョンをテーマに、提言や意見発表をプレゼンテーション方式で実施するコンテスト。
決勝大会・表彰式：11月9日(土)　新潟日報メディアシップ
表彰：グランプリ、準グランプリ、協賛社特別賞、佐野藤郎特別賞、奨励賞、食の新潟国際賞財団特別賞

５．佐野藤三郎氏顕彰事業の実施

佐野藤三郎氏の新潟市名誉市民称号の受章を機に、その功績を顕彰し広く伝える事業を関係団体（佐野藤三郎顕彰委員会）との協力により実施する。

（1）財団の佐野藤三郎氏顕彰事業検討委員会の開催（委員長　財団理事　中山輝也氏）
佐野藤三郎氏を顕彰する事業を検討し財団理事会に提言するとともに事業実施のサポートをする。

（2）佐野藤三郎氏を広く伝える事業
新潟市名誉市民称号の受章を機に、更に佐野氏の偉業を広く市民に伝える事業を実施する。特に若者への周知と理解を深めるための事業を新潟市や教育関係者、マスコミなどの協力を得て実施する。

① 佐野藤三郎のマンガの増刷と活用事業
市内学校や関係団体への寄贈。小・中学生を対象としたマンガ読書感想文などの募集・表彰事業

② 佐野藤三郎氏の教材化
佐野藤三郎氏と亀田郷の歴史を学ぶ教材への活用。新潟市社会科副読本「わたくしたちの政令市新潟」への掲載により、佐野藤三郎氏の功績やマンガ等が小学生のタブレット端末で視聴可能となった。

③ 佐野藤三郎氏を伝える出前講座の開催
市民や団体などの要請により開催する、佐野藤三郎氏の偉業と足跡を伝える出前セミナーの開催

④ 佐野藤三郎氏の足跡を訪ねるバスツアーの開催
新潟市民を対象に佐野藤三郎氏のゆかりのある土地や施設を訪れ、関係者によるミニ講話の開催

⑤ 佐野藤三郎氏紹介のホームページの作成と開設
名誉市民称号の授与により佐野藤三郎氏への関心が高まるのを機会に、佐野氏を周知するため、関係する功績や情報などを整理し内外に発信する。

⑥ 佐野藤三郎氏名誉市民受章祝賀会の開催
開催時期：令和6年秋
新潟市名誉市民称号受章をお祝いする祝賀会を、佐野藤三郎顕彰委員会と新潟市と協力して、広く市民参加で開催する。

６．地域貢献事業の企画および参加協力

（1）SDGs推進事業への協力
「新潟SDGsアワード」（令和７年2月開催予定）
「食の新潟国際賞財団特別賞」を設け特別賞を授与する。

（2）新潟市J-クレジット普及推進事業への協力
新潟市が推進するJ-クレジットの普及推進に協力するため「新潟市Jクレジット普及推進協議会」に参加し、持続可能な農業を推進するとともに、プロジェクトで創出したクレジットにより、地域農業や企業の環境保全活動の活性化に協力する。

第8回食の新潟国際賞の選考委員会を開催（令和6年5月16日）

第8回食の新潟国際賞の受賞候補者について審議する選考委員会が5月16日（木）に東京で開催されました。会議には唐木英明委員長をはじめ9名の選考委員が出席し、あらかじめ行った書類審査に基づいて、受賞推薦候補者について慎重に審議を行いました。
この結果、大賞、佐野藤三郎特別賞、21世紀希望賞、地域未来賞の各賞からそれぞれ3名の候補者が選考されました。この受賞推薦候補者は6月28日（金）に開催される理事会に答申され、理事会で最終決定されます。
受賞者は基本的に各賞とも1名の予定ですが、場合によっては2名となることもあります。
なお、今回は日本をはじめ8カ国49名の候補者の推薦が寄せられました。

国際シンポジウムを開催（財団特別講演会）

「激動する世界情勢と食料問題」

日　時　2024年 4月 26日(金) 15:00
会　場　ホテル イタリア軒　サンマルコ
参加者　72名

特別講演（1）「2024年、閉塞感漂う国際情勢と日本」

赤阪 清隆　氏　　元国連事務次長（広報担当）
公益財団法人ニッポンドットコム 理事長
公益財団法人食の新潟国際賞財団 評議員

1948年生まれ。京都大、英国ケンブリッジ大卒。
1971年　外務省入省、ガット（世界貿易機構WTO の前身）、世界保健機関（WHO）事務局に勤務
1997年　外務省国際協力部参事官として、地球温暖化防止のための京都議定書の交渉にあたる
2000年　国連日本政府代表部大使
2003年　経済協力開発機構（OECD）事務次長
2007年から2012年まで　国連広報担当事務次長
2012年8月から2020年10月末まで　公益財団法人フォーリン・プレスセンター理事長
2022年6月29日より公益財団法人ニッポンドットコム理事長に就任。

【講演内容（要約）】

目を世界に転じると、ウクライナ戦争、イスラエルとハマスの戦争など、先の見えない混沌とした国際情勢が続いている。ロシアにプーチン、中国に習近平、北朝鮮に金正恩など、権威主義国のリーダーが、まるで世界の時計がストップしたかのように、いつまでも権力の座に居座っている。そこに、トランプ前米大統領がまた返り咲きかねない、世界は前に進むどころか、泥沼にはまり込んで動けないような状態だ。現在の国際情勢は、出口の見えない「閉塞感」そのものだ。
皆さんに少しご注目いただきたい点は次の通りです。

●世界は、自由主義圏と権威主義国圏に分断され、その間を右往左往するグローバルサウスの国々の存在感が増大しており、しかも驚くべきことに、最近の世論調査では、ロシアに好感を持つ新興・途上国が増加。またASEAN10か国中、米中なら「中国を選ぶべき」とする人々が過半数を占めたという。

●トランプがもし再選されたら、というシナリオについては、英国のファイナンシャル・タイムズ紙のコメントは明快で、トランプには「カネの亡者」として対応するのが良いとすすめている。「金で動く人物なのだ。それも法外な金額でなくてもいい」と言い切っている。

●中国の経済力が米国を追い抜くのかどうかは諸説が飛び交ってきた。昨年12月には英国のシンクタンクが、2037年には米中のGDPが逆転するとの予測を発表して、「やはりそうか」という状況だ。この予測で注目されるのは、2038年には、中、米、インドに続いて日本が4位に残っていること。現在の日本の経済力は、米、中、ドイツに続く4位で、もうすぐインドに抜かれると予測されているが、どっこい、ドイツは再び日本の後を追うことになるとのこと。それでも、現在のような円安が続けば、このような予測もどうなることやら。

●これからは、データとAI（人工知能）の世紀になることは間違いがないと思う。すでに企業へのAIの導入が日米とも急速に進んでいる。

●ウクライナ戦争の日本への教訓は、真剣に考えなければいけません。専門家が「想定外だった」ということが多すぎる。この戦争はいつまで続くのか？そして、どのような終わり方をするのか？「ウクライナは明日の東アジア」という岸田首相の見方は正しいのでしょうが、戦争が拡大して、ひょっとして第三次世界大戦が始まる恐れはないのでしょうか？

●「日本を敵国が攻撃し、自分の身近な家族などに危害が及ぶ可能性があるときに、あなたは戦闘員として戦う用意があるか？」という問いに対して、戦うという肯定的な回答をした日本の18歳前後の若者はわずか13%だ。ベトナムは96%、中国89%、エジプト84%に比べ、なんと低い数字でしょう！どうしたらよいのか。

●世界で起きている問題の解決のために、わたしたちができることには限界がある。それでも、国際情勢をフォローし、情報を集め、意見を投書やメールで広く伝え、議論し、選挙の投票に出かけ、ボランティア活動に参加するなど、少しはできることがある。

●世界三大幸福論の一つ、フランスのアランの幸福論の一節に、「悲観主義は気分に属し、楽観主義は意志に属する」という言葉がある。意志を強くすれば目の前を明るくすることができると信じて、この「閉塞感」の漂う世の中を少しでも楽観的に見ることにしたい

国際シンポジウムを開催（財団特別講演会）

特別講演（2）「世界の食料危機とWFPの取り組み～新潟の皆さんと話し合う～」

津村 康博　氏　　WFP国連世界食糧計画　日本事務所　代表

1994年東京大学卒業。1998年上智大学大学院修了。
民間企業・団体を経て、1998年より25年間、国連WFPに勤務。
イタリア・ローマ本部を皮切りにコソボ、日本（WFP日本事務所）、中央アフリカ共和国、コンゴ民主共和国、セネガル（西アフリカ地域局）、モーリタニア、シエラレオネ、ガンビアなど9か国を拠点にWFP活動に携わる。アフリカでの勤務は15年におよぶ。
担当分野は、本部や連絡事務所での連携促進・政策調整から、現地食料支援活動の調整、災害準備対応と緊急支援活動、農村自立促進プロジェクト実施管理、現地事務所における管理職（代表職：ガンビア、副代表職：モーリタニア及びシエラレオネ）にわたる。
2023年7月31日よりWFP国連世界食糧計画日本事務所代表に就任。

【講演内容（要約）】

① WFP国連世界食糧計画について

1961年設立。世界120の国と地域に拠点。2023年に1億5000万人に食糧支援を実施。2万4000人以上の職員がいる、うち日本人は58人である。毎日トラック6500台、航空機140機、船舶20隻を稼働している世界最大の人道支援機関。2020年にノーベル平和賞を受賞した。

② 世界の食料不安

世界の飢餓人口は7億8300万人。世界人口の約10人に1人が食料不安にある。増加の原因はコロナウィルスによるパンデミック。2022年からのウクライナ紛争の影響が大きい。特にアフリカや中東では増加している。なかでも急性食料不安（生命や生活に差し迫った危険がある深刻な状態）は、紛争や気候変動のインパクトが非常に強い地域である。2023年には78か国の3億3300万人が急性食料不安に直面している。中東のガザ、スーダン、ウクライナ、ミャンマー、ハイチその他である。

③ 気候危機の影響

近年、深刻度を増しているのが気候変動の影響。世界の食料不安の57%が気候変動の影響を受けている。地球沸騰といわれるほどの気候変動。洪水や干ばつ等で飢餓人口が増える。洪水で橋や道路のインフラが破壊され、せっかく収穫した食料にアクセスできない。干ばつで家畜の飲み水もなくなる。私は直前までアフリカのガンビアにいた。ガンビアはガンビア川に沿った小国で平らな国で一番高い標高で60mしかない。海面上昇で塩水が入り水田に影響してコメがとれない。昔は二期作も可能であったが今は輸入国になってしまった。

④ WFPの緊急支援

資源や食料を求めて争いが激化する。人々は農村を捨てて都会に、あるいは難民となって国外へ脱出する。人を満載した危険な小舟で欧州や遠く北米や中南米を目指す。途中で命を落とす人も多い。西アフリカの国々ではクーデターも起こり、国民の暴動やそれらを利用して政治家や軍部の汚職等で混乱。大国の思惑やワグネル等の傭兵が入り混乱が深まる。

⑤ 気候変動・平和への脅威・食料危機の悪循環

アフガニスタンでは2021年にふたたびタリバンが制圧。大地震も発生し700万人分の支援をしたが、1730万人が支援を必要としており足りない。アフリカのスーダン紛争、1800万人が急性食料不安に直面。200万人に支援したが国内避難民660万人。難民180万人発生した。中東パレスチナ問題は昨年11月から大混乱が続いている。ガザ地区では220万人と言われた飢餓人口が急激に増え、3か月で人口の半数が餓死寸前の状況に。戦闘中の地域には支援に入れない。25年間WFPで働いているがこれほど危機的な事態は経験がない。

⑥ 自立のための支援

緊急支援だけでは自立できない。WFPは自立のための支援も行ってきた。学校給食や母子栄養改善支援などを行っている。アフリカなどの途上国では学校給食が1日で唯一の食事という現実もある。学校給食があると安定した市場ができ、農家も安定した生産、供給の仕組みができる。地産地消型学校給食が可能となる。各国の政府が対応するようなシステム強化と能力強化の手伝いをしている。生産から流通・販売・消費までのシステムづくりを指導している。

⑦ WFPの究極的な目標はWFPがなくなることである

SDGsの目標は2030年までに飢餓撲滅といっている。それは難しいかもしれないが2050年台には達成したい。WFPの究極的な目標はその役割が終了することである。私は20年ぶりに日本に戻ってきた。日本はGDP地盤沈下といわれるが世界ではリスペクトされている国である。しかし、大地震等が起これば日本も被支援国に代わるかもしれない。世界は密接に結びつき食料供給に影響しあっている。問題意識を高めて意見を発信していくことが大切である。

公益財団法人 食の新潟国際賞財団　賛助会員

（令和6年5月現在）
（敬称略・順不同）

● 特　別　会　員

亀田製菓㈱
一正蒲鉾㈱
㈱第四北越銀行
㈱新潟日報社
亀田商工会議所
にいがた22の会
㈱ブルボン
サトウ食品㈱
㈱栗山米菓
㈱新宣
㈱新潟クボタ
㈱日本食糧新聞社
㈻新潟総合学園
新潟県農業協同組合中央会
亀田郷土地改良区
㈱エイケイ
NST新潟総合テレビ
五十嵐建設工業㈱

● 正　　会　　員

新潟縣信用組合
㈱第一印刷所
㈱本間組
石本酒造㈱
㈱ミカサ
神山物産㈱
ハセガワ化成工業㈱
藤屋段ボール㈱
㈱タケショー
㈱新潟博報堂
BSN新潟放送
新潟陸運㈱
㈱新潟食品運輸
月島食品工業㈱
㈱ニップン関東支店
日本甜菜製糖㈱
㈱鳥梅
新潟工科大学産学交流会
㈱キタック
北越工業㈱
丸榮製粉㈱
鍋林㈱ヘルスフーヅ事業部
TeNYテレビ新潟放送網
㈱栗田工務店
三和薬品㈱
松田産業㈱
セッツカートン㈱新潟工場
東邦産業㈱
麒麟山酒造㈱
㈱加島屋
㈱日本フードリンク
㈱ディモルギア
UX新潟テレビ21
イカリ消毒㈱
新潟工科大学
㈱日本旅行新潟支店
㈱田中組
（医）愛仁会　亀田第一病院
㈱ひらせいホームセンター
ワタキューセイモア㈱　新潟営業所
㈱エヌエスアイ
㈱トップライズ
㈱ウオショク
㈱ヤマダ
㈱新潟国際貿易ターミナル
八海醸造㈱
㈱荏原製作所 北陸支社
㈱せいだ
新潟医療生活協同組合

● 個　人　会　員

古泉　肇
杉本　克己
佐藤　久栄
渡辺　昭雄
大越　斎
河瀬　三千夫
大森　ゆかり
加藤　寿一
阿部　文仁
宮口　澄子
中村　雪絵
池田　祥護
大橋　祐貴
遠藤　俊介
田中　雅史
荒井　弘美
下條　幸二
長谷川　久晃
宮島　泰
駒形　正明
伊藤　雅明
早川　重男
小林　松一
藤島　安之
近藤　鴻
阿部　徳威
槙坂　文晴
野口　正晴
和澄　孝男
高橋　慶三
石附　由美子
高尾　茂典
五十嵐　康子
村山　浩太郎
星野　幸三
前田　穣
葉葺　正幸
藤間　佑輔
重泉　篤史
廣川　正通
酒井　栄一郎
高﨑　俊哉
阿部　貴美
秋堂　春美
田村　征司
高橋　昭博
和田　充彦
大川　秀雄
田中　作一
清水　良一
酒井　定勝
五十嵐　修
阿部　昭一
斎藤　幸広
五十嵐　豊
五十嵐　早苗
稲葉　晋
糸満　盛人
桐原　隆晃
津島　章彦
品田　卓也
本間　康弘
小谷　尚志
佐藤　聡
高橋　裕作
大沼　成勝
長谷川　克弥
樋口　正仁
高橋　眞代
高畑　昭文
大倉　正寿
佐藤　和雄
五十嵐　源一
齋藤　秀明
望月　健三郎
渡邉　信也
田辺　俊文
古泉　幸一
佐藤　文男
川﨑　千春
北垣　大介
長井　基樹
舟﨑　義朗
渋谷　政道
中野　克之
高橋　道映
小林　守
小平　勝志
丸山　智史
山口　穣
伊積　豊
峰尾　昌明
廣瀬　利雄
吉岡　謙一
大沢　一衛
新保　房機
松本　裕志
山田　雄治
赤塚　義廣
小田　静二
加藤　純子
高橋　征男
秋山　正之
小林　哲也
岸田　良満
小川　陽一
村山　雄亮
高橋　誉
田中　弼
阿部　欣也
藤田　正明
岡田　龍
田中　湖雄
小林　稔
大森　武士
山口　勉
坂田　武利
佐藤　勉
古泉　榮三
當野　篤
鈴木　正二
坂井　俊一
渡邉　徹
高倉　広利
高橋　克郎
松川　忠史
岡田　茂久
中村　健一
大日方　聡
北爪　文義
最上　正人
佐藤　浩晃
杉谷　浩一
池田　一史
小野　隆樹
牧　利幸
吉田　たかし
高橋　常考
門脇　基二
大島　千春
佐藤　純
髙山　利夫
竹石　松次
鈴木　伸作
栗田　浩
清水　泰成
田村　泰生
濵野　剛
遠山　幸男
小林　宏志
宮下　好文
近藤　正
石田　勇介
村山　和恵
榊原　由貴
宮嶋　一博
田邊　威
伊藤　正弘
山本　善政
田村　敏郎
大谷　勝男
野上　敏
倉嶋　則昭
久保田　紳一
古泉　幸代
佐藤　銀治郎
栗田　朋子
阿部　愛子
山嵜　尉生
小川　善弘
小野　隆樹
柳澤　敏郎
坂田　浩一
高橋　佑
佐藤　正尚
小林　達
金田　季之
小嶋　孝代
高橋　大介
本間　春治
小島　隆

「食の新潟国際賞」は新潟市の補助金を受けて実施しています。